

All rights reserved. HC Asset Management co.,ltd. 2006

HC資産運用セミナーvol.36

資産運用の高度化

HCアセットマネジメント株式会社

金融商品取引業者　関東財務局長 （金商）第430号
加入協会　一般社団法人資産運用業協会

https://www.fromhc.com

2026.11.24

概要

資産運用の高度化とは
どうして運用を行うのか、どのようなものに投資を行うのかといったことを、より原理化して考えることであり、投資資本の使途の実現ともいえる。金融庁は、「資産運用サービスの高度化に向けたプログレスレポート」を通じて、資産運用会社等に対し、顧客の最善の利益を勘案した業務運営と、運用力の向上、ガバナンス・経営体制の強化を求めている。

資産運用の四つの原則
資産運用の原点に返り、運用の目的に忠実な資産運用のあり方を考えることが必要である。
本源的価値（インカム）、損失の可能性（リスク）、価格変動（ボラティリティ）、保守主義の四原則を指す。

投資の目的
第一に、果実の稼得であり、稼得した果実を投資の目的に応じて費消すること。
第二に、果実の稼得を安定化させるために元本の保全を図ること。
第三に、（あるいは、追加的に、理想的に）、元本の増殖を図り、同じ期待収益率なら果実を大きくし、同じ果実なら期待収益率を下げてリスクを低減させていくこと。
- 一般に、元本の永続性が高く、果実の費消目的が明瞭なものほど、投資の目的が明確で、投資の質が高いと言える。
- 逆に、元本の性格が明瞭でなく、果実の費消目的が確立していないところほど、問題事象が起こりやすくなる。

負債の投資と資本の投資
投資の質は、投資資金の資本性の強さに規定される。しかしながら、負債性が強く資本性が弱い預金負債や、保険負債でも、個々の負債は日々変動していても、巨大な集積としての負債合計において大きな変動がなければ、資本性があるといえる。

預金取扱金融機関の「資産運用の高度化」が意味するもの
預金取扱金融機関は最も負債性が強く資本性が弱い預金を運用原資とする。制度的元本保証という預金の特性をどう考えるべきか。預金負債の実効的長さとは何か。本業ではない投資を本業にすべきか。そのとき預金取扱金融機関固有の投資の方法論があるのか。かかる事項を検討することが求められている。

生命保険・系統上位の「資産運用の高度化」が意味するもの
系統預金の資本転換の可能性を見込んでいいのか。保険負債の実効的長期性に資本性を見込んでいいのか。かかる事項を検討することが求められている。

個人の資産形成
資産形成とは、純資産の形成で、純資産を負から正に転じることである。純資産とは資産＋将来収入現価－負債－将来支出現価を指す。

用語集もご参照ください https://www.fromhc.com/glossary/

All rights reserved. HC ASSET MANAGEMENT CO.,LTD. 2006

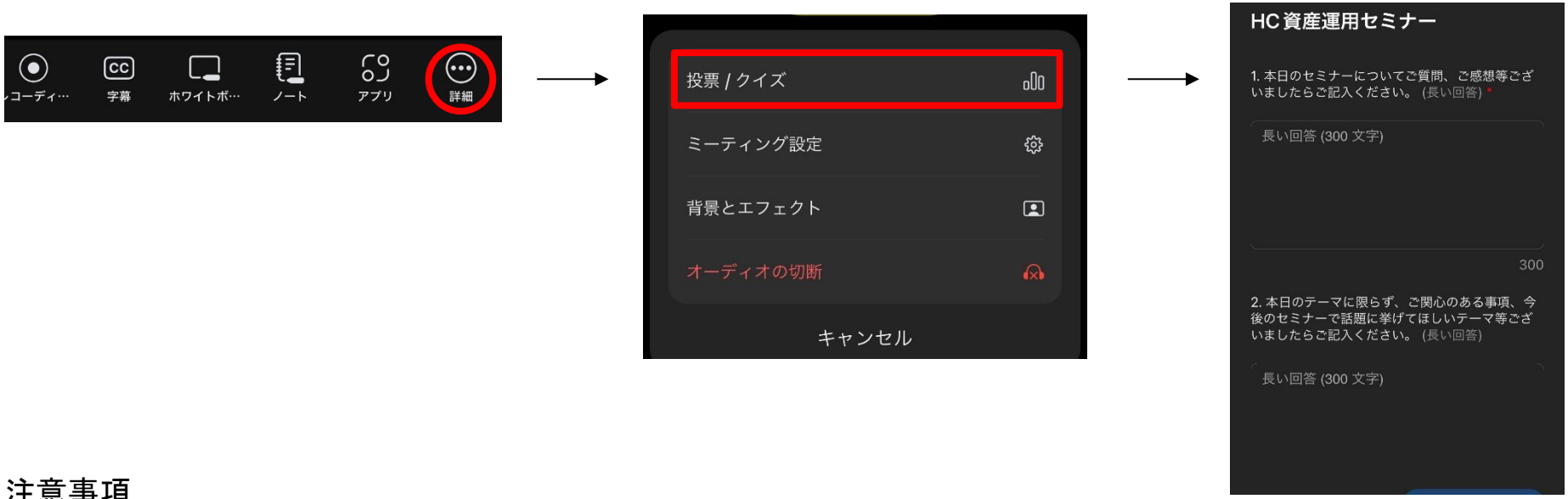
投資の目的

	預金取扱金融機関	生命保険会社 系統上位	企業年金	財団 ファミリーオフィス	私立学校法人	個人の資産形成
果実の費消目的	本業の収益不足の填補？	契約者への利差益還元 下部組織への収益還元	給付＝果実＋掛金という等式の充足	事業支出 生計費	事業支出 建替費維持	資産取崩しによる生計費への充当
元本の形成方法	強い顧客基盤の元での預金の安定的滞留	負債の長期性と大きな集積としての固定性	加入員受給者の権利の担保資産としての固定性	寄付 純資産	施設費の滞留 退職給付引当金、奨学金等	投資信託に集積された形成資産の固定性

All rights reserved. HC ASSET MANAGEMENT CO.,LTD. 2006

講演後アンケート/注意事項

今後の運営に活かしたく、ご質問やご意見、ご感想、ご興味あるテーマなどを承っておりますので、ご自由にご意見をお寄せください。
回答方法：各セミナー講演途上でにZoom上で配信します。配信後は一度閉じた場合でも、以下の通り詳細から再表示できます。



注意事項

- 本セミナーは、資本市場における種々の投資対象や投資に関する概念等について解説・検討を行うものであり、当社が行う金融商品取引業の内容に関する情報提供及び関連する特定の金融商品等の勧誘を行うものではありません。
- 本資料中のいかなる内容も将来の投資成果及び将来の市況環境の変動等を保証するものではありません。
- 本資料の著作権その他知的財産権は当社に帰属し、当社の事前の許可なく、本資料を第三者に交付することや記載された内容を転用することは固く禁じます。

All rights reserved. HC Asset Management co.,ltd. 2006